

# 価値ある事実 —ホワイトヘッドの多即一の論理—

村田康常

あなたはわたしの嘆きを数えられたはずで。

あなたの記録に

それが載っているではありませんか。

あなたの革袋にわたしの涙を蓄えてください。(新共同訳『旧約聖書』「詩編」56:9)

貨幣は、苦痛や快樂の量を測定する手段である。この手段の精密度に不満な人たちは、もっと精密な手段を工夫すべきである。そうでなければ、政治学や倫理学に別れを告げるべきである。(J. ベンサムの遺稿, Baumgardt, D., Bentham and Ethics Today with Bentham Manuscripts hithero unpublished, New York: Octagonm 1966, p.562)

第一に、人々は、生命、名誉、愛情などを何物にも換え難いものとして、況して、貨幣によって測ることの出来ないものとして貴んで来た。しかし、それらが失われ、傷つけられ、裏切られた場合、そこから生じる苦痛を辛うじて贖い得るものがあるとすれば、それは、いかに私たちの感情に背いても、結局、貨幣であるほかはないであろう。生命、名誉、愛情などばかりではない。広く社会の諸問題を見渡し、その解決を真面目に考えていけば、そういう「必要」は至るところにある。(清水幾太郎『倫理学ノート』講談社学術文庫、2000年(1972年)、132ページ)

君をこの手で抱きしめたいよ

君の寝顔を見つめてたいよ

……

お金なんかはちょっとでいいのだ(奥田民生 作詞作曲「大迷惑」ユニコーン)

## 0. アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead: 1861-1947)

1884～1914 ケンブリッジ時代《前期：数学・数理論理学》『普遍代数論』『プリンキピア・マテマティカ』

1914～1924 ロンドン時代《中期：科学哲学・自然哲学》『自然認識の諸原理』『自然の概念』『相対性原理』

1924～1947 ハーバード時代《後期：形而上学》『科学と近代世界』『過程と実在』『観念の冒険』

### 1. はじめに

この発表では、以下の2つの理由から、事実と価値の二元分裂という近代哲学の状況に対して両者の根源的統一を説いたホワイトヘッド哲学の多即一の論理と具体性についての取り扱いを考察したい。

2017年3月に大阪大学で開催された数理経済学会方法論分科会近畿地区春季ジョイント・セミナー以来、大阪大学経済学研究科の浦井憲先生が主催する研究サークルで議論が継続してきた。その主題はさまざまであったが、「貨幣とは何か」「企業とは何か」といった問いをめぐって、現代企業文明を問うような領域横断的な議論が展開された中で、ホワイトヘッドの「具体性を置き違える誤謬」がキーワードの1つになった。学問の主体性や探求する精神の自由とは何かが問われ、私たちは「具体性を置き違える誤謬」のうちにあるのではないかという問題が方法論的な議論の中で提起された。強固な思索ではなく、方法論的な限界と適用の困難さを自覚した思索に向かうような予感があった。そのような議論に触れながら、ホワイトヘッドが事実と価値を一つのものとして扱うような視座を提示してきたことが大きな意味を持つのではないか、という個人的な感想を抱くようになった。「哲学に関する論争は、今日少なくとも一点において、意見の一致を見ている。哲学は単一の最終的な規範的根拠をあたえることをみずからの任務とは考えていないというのが、そ

れである」という G. バッティモと P.A. ロヴァッティの『弱い思考』の冒頭の言葉に、ホワイトヘッドも同意するだろう<sup>1</sup>。

これが、この発表の第一の動機である。第二の動機はもっと個人的な研究テーマに絡むことである。20 世紀英米の哲学者の中でも孤高の位置を保ってきたホワイトヘッドだが、改めて 20 世紀英米哲学の諸潮流の中に位置づけることを日本のホワイトヘッド研究者もしなければならぬ時期に来ている、という思いである。

## 2. 20 世紀初頭のケンブリッジ大学

私から見たこのジョイント・セミナーの問題関心に向かってこの発表の議論を近づけていくために、この第二の動機について少し説明したい。

ホワイトヘッドの哲学は、いわば、20 世紀の英米哲学のどの思想潮流からも「浮いた」存在と見なされてきた。20 世紀の英米哲学では、分析哲学とプラグマティズムが 2 大潮流だが、ホワイトヘッドはどちらとも少なからぬ関わりをもちながらも、いずれにも属さない独自路線の哲学者と位置づけられる（あるいはどこにも位置づけられない）のが一般的だった。彼は現代物理学の知見に見合った形而上学的宇宙論の体系を構築するという意図を公然と示していて、このように体系的な「形而上学」を標榜することが、英米圏だけでなく 20 世紀の哲学全体の中でも、特に孤高で独自で難解だという評価の主な理由となっているように思える。

しかし、ホワイトヘッドは、それぞれの仕方で脱形而上学の道を進むプラグマティズムとも分析哲学ともまったく没交渉だったわけではない。彼もまた、まさにそれらの哲学潮流を育んだ同じ学問風土の中で同じ空気を呼吸していた。たとえば彼は自分の哲学が W. ジェイムズと J. デューイの古典的プラグマティズムに多くを負っていると明言し、また Ch. S. パースの遺稿を編纂して全集を刊行することを弟子の Ch. ハーツホーンに指示するなど、プラグマティズムの哲学とはいくつかの接点をもっている。

一方、ホワイトヘッドと分析哲学との思想的交流や影響関係はずっと希薄であるが、人間関係はプラグマティズムの哲学者たちに対してよりも濃密で直接的だった。ホワイトヘッドは分析哲学誕生の現場に立ち会い続けている。ホワイトヘッドが B. ラッセルとともに *Principia Mathematica* (『数学原理』) 全 3 巻 (1910-1913 年) を刊行する 7 年前、ケンブリッジ大学トリニティ・カレッジでフェロー (研究員) をしている時期に、分析哲学の嚆矢とされる R. E. ムーアの *Principia Ethica* (『倫理学原理』) (1903 年) が刊行されている。F. L. G. フレーゲの初期の論理学や G. ペアノの記号法を参照した『数学原理』もまた、分析哲学のための主な道具立てを用意した。ハーバード大学に赴任してからも、ホワイトヘッドは、W. v. O. クワインの博士論文の指導教官になったり D. デイヴィッドソンを指導したりした。しかし、ホワイトヘッドの後期形而上学には、分析哲学との思想的交流の痕跡は皆無である。

ホワイトヘッドは、ムーアの『倫理学原理』に始まる分析哲学やメタ倫理学の揺籃期に、それらと同じ時代の同じ環境にいて同じ問題提起を共有していた。にもかかわらず、彼はケンブリッジ大学を去ってロンドン大学へ、やがてハーバード大学へ移り、そこで事実と価値の二元分裂論を批判する独自の実在論を構築して、分析哲学やメタ倫理学とは対極の方向に進んでいく。この分枝点は、当時のケンブリッジを中心とした英国の道徳哲学の状況、つまり J. ロック、D. ヒューム以来の経験論の伝統と J. ベンサムや J. S. ミルの功利主義、そして新ヘーゲル主義者たちの哲学という古い土壌の中にある。つまり、ラッセルもムーアも J. M. ケインズも、これらの伝統によって育てられつつこれらの前時代の道徳哲学的伝統とは決別するかたちで出発しようとしたが、彼らよりほんのわずか世代が上のホワイトヘッドは、この経験論や功利主義の土壌からむしろ可能な限り多くのものを継承しつつ、近代哲学のデカルト主義とは決別して、当時の物理学の最新の知見とも合致するような自然哲学を目指した。

---

<sup>1</sup> ジャンニ・バッティモ、ピエル・アルド・ロヴァッティ編著『弱い思考』「まえがき」上村忠男、山田忠彰、金山準、土肥秀行訳、法政大学出版、2012 年、1 ページ。 *Il pensiero debole*, a cura di Gianni Vattimo e Pier Aldo Rovatti, Milano: Giacomino Feltrinelli editore, 1983.

ここで再確認しておきたいのは、ホワイトヘッドも多くを負っている英国の経験論哲学と功利主義哲学の系譜が 20 世紀に辿ることになった道、特に、いわゆる道徳哲学から近代経済学と近代倫理学が分枝するポイントである。近代英国に興った新しい哲学は、F. ベイコンからロックへと続く系譜の中で、啓示宗教の神を弁証する中世以来のキリスト教神学とその婢となっていた哲学を脱して、人間の本性を含む「自然」を経験に根ざして探求することを始めた。哲学から経済学が分枝し、同時に倫理学があらたな装いをまとったことになった発端は、18 世紀のスコットランドだった。それは、ヒュームが『人性論』を著し、アダム・スミスが『道徳感情論』と『国富論』を著した時代である。スコットランドの道徳哲学（ハチスン、ヒューム、スミス）は、イングランドの脱神学・脱形而上学の経験論哲学の系譜を引き継ぎながら、価値に関する新たな学知を創始していく<sup>2</sup>。ヒュームは『人性論』の第三部でいわゆる価値と事実の区別を明示したとされ、アダム・スミスは 2 つの書物で近代西欧において倫理学と経済学が確立されていく道筋を開いた。こうして道徳哲学者たちは中世的なキリスト教神学と形而上学の呪縛から脱していった。その後の英国哲学史は、この分枝と近代化のための努力についての叙述に満ちている。事実と価値の厳密な区別、あるいは存在から当為を導くことはできない、というヒュームの信条<sup>3</sup>は、哲学だけでなく倫理学、経済学、社会学、宗教学等々の諸学に

<sup>2</sup> グラスゴー大学道徳哲学教授だったアダム・スミス自身は、自分を道徳哲学者と見なしていた。道徳哲学から経済学が分枝する起点をアダム・スミスに求める研究は多い。たとえばハーマンは次のように述べている。「通常われわれはアダム・スミスを経済学者とみなし、また『陰気な学問』としての経済学の創設者と考えている。なるほど『国富論』には陰気な章句があることは確かである。しかしながら、アダム・スミスは自分自身を主として道徳哲学者と考えており、したがって彼の研究のほとんどは、結局、ハチスンが提起した次のような基本的な問いに答える形になっているのだ。すなわち、なぜ人間は概して邪悪であるより善良であるのか……といった問いである。」（アーサー・ハーマン『近代を創ったスコットランド人—啓蒙思想のグローバルな展開』篠原久監訳、守田道夫訳、昭和堂、2012 年、203 ページ）また、ヒューム、アダム・スミスと 18 世紀スコットランドの道徳哲学については、次の著作も参照。ヴィンセント・M. ホープ『ハチスン、ヒューム、スミスの道徳哲学—合意による徳—』奥谷浩一、内田司訳、創風社、1999 年。Hope, V. M., *Virtue by Consensus: The Moral Philosophy of Hutcheson, Hume, and Adam Smith*, Oxford: Oxford University Press, 1989. 神野慧一郎『モラル・サイエンスの形成—ヒューム哲学の基本構造—』名古屋大学出版会、1996 年。

<sup>3</sup> 近代西洋の諸学の方法論的な特徴となっている事実と価値の二分法、あるいは存在と当為の二分法は、プラトン、アリストテレスに淵源するとも言われるが、近代におけるその源流は D. ヒュームにあるとされる。たとえば H. パトナムは次のように言っている。「事実／価値二分法の歴史は、ある点で、分析的—総合的の二分法の歴史と並行的です。前者は、後者同様、ヒュームの二分法——『存在』から『当為』を推論することはできないというヒュームの有名な教説の中に暗に含まれている二分法——によって予示されています。」（ヒラリー・パトナム『事実／価値二分法の崩壊』藤田晋吾・中村正利訳、法政大学出版局、2011 年（新装版）、15 ページ。Putnam, Hilary, 2002, *The Collapse of the Fact / Value Dichotomy and Other Essays*, 3rd. print, Cambridge: Harvard University Press, 2004, p.14.)

パトナムは、デューイの次の言葉をエピグラムに引用している。「われわれが罪と呼ぶところの紛うべくもない事実はどこにあるのか。それを指し示してみよ。それが存在する時間を測定してみよ。その本質ないし本性を記述してみよ。それがどの感覚ないし能力に対して自らを現すのかを説明せよ。それは、思知らずな人間の心に宿っている。それゆえ、その人はそれを感じ、それを意識するに違いない。だがそこには、悪意の情念あるいは絶対的無関心の他に何も存在しない。それらのものが、それ自体で、常に、そしてあらゆる状況において、罪だと言うことはできない。むしろ、それらは、以前われわれに好意を 표시してくれた人たちに対して向けられた場合にのみ、罪なのである。したがって、われわれはこう推論してもよいであろう。思知らずという罪はいかなる特定の事実でもなく、それは、目撃者に提示されると、彼の心が持つ特定の構造と組織によって、非難の感情が引き起こされるような、錯綜した状況から生まれるのだ、と。」（パトナム、同書、7 ページ。Putnam, 2002, p.7）

ヒュームは『人間知性論』第三巻冒頭において、まず「理知とは真偽の発見である。ところで真偽は、観念間に真に存する関係との一致不一致か、真の存在ないし事実との一致不一致か、そのいずれかに存する。」（デイヴィッド・ヒューム『人性論』(四)「第三篇 道徳に就いて」大槻春彦訳、岩波文庫、1952 年、15 ページ）と述べたあとで、次のように述べる。このような箇所が、事実と価値あるいは規範との二分法を示したものとされる。「道義に関して私がこれまでに出会ったすべての体系に於て、私は常に気がついていたのであるが、それらの体系を説く者は、始め暫くのあいだ通常の論究のし方で進んで行って、神の存有を確立し、或は人間界の諸事象に関するいろいろな考察を行う。が、そのとき突然、私は見出して驚くが、私の出会う命題はすべて、であるとかでないとかいう・命題を結ぶ・通常の連辞のかわりに、べきである又はべきでないで結合されて、そうでない命題には何一つ出会わないのである。この変化は、これを看取する者がいないとはいえ、極度に重大な事柄である。何故なら、このべきである或はべきでないは、断言の或る新しい関係を放言している。従って、これを観察して解明する必要がある。また同時に、いかにしてこの新しい関係がそれと全く異なる他の〔である又はでないの〕関係から導き出されることができるか、その理由を考える必要がある。しかも、この理由を与えることは全く想いもつかないことのように思えるのである。……この僅かな注意は……徳と悪徳との区別は事物の関係だけを根拠とするものでなく、理知によって看取されるものでないこと、この点を我々に判らせるであろう。」（ヒューム、同書、33-34 ページ。）

まで深い影響を与えている<sup>4</sup>。

功利主義の時代を経て、20世紀になると倫理学ではムーアが、経済学ではケインズが、それぞれの学の新時代を拓くような記念碑的な仕事をした。今では、メタ倫理学と経済学の対話はなかなか難しいが、20世紀初頭にはケンブリッジ大学学生の知的サークル「使徒団」や「ブルームズベリー・サークル」などでムーアやケインズがラッセルや F. ラムゼイ、ヴァージニア・ウルフ、L. ストレイチーらと美や愛について語り合った<sup>5</sup>。1910年にケンブリッジ大学トリニティ・カレッジを去るまでは、ホワイトヘッドもこのケンブリッジの雰囲気の中にいた。そして1912年にはそのトリニティ・カレッジにL. ウィトゲンシュタインが入学し、ラッセルやムーアのもとで論理の基礎に関する研究を始め、ケインズとの交流も深めている。

ムーアの『倫理学原理』をケインズが「プラトンよりすぐれている(better than Plato)」と絶賛したのは有名な話である<sup>6</sup>。『若き日の信条』の中で、ケインズは次のように振り返っている。

「私がケンブリッジ大学に入学したのは、1902年のミカエルマス学期であり、この第1学年の終りには、ムーアの『倫理学原理』が出版されている。現在の若い世代がこの本を読んでいるということは、耳にしたことがない。だが、われわれにとっては、もちろんこの書物の与えた影響と、出版の前後に行われた議論とは決定的に重要なものであった。そしておそらくいまでも、ひきつづきそうであろう。」<sup>7</sup>

清水幾太郎が『倫理学ノート』に記したように、ムーアに始まるメタ倫理学と、いわゆる限界革命以降の英国の経済学は、20世紀前半のまさにこの時期に、価値と事実の二分法をかかげて古い道徳哲学や功利主義と決別した。両者は、それぞれに厳密さと正確さを追求してその方法論を磨いて来た。清水幾太郎が示したことは、大雑把に言えば、ムーアが、不確定な要素にまみれた事実の領域から純粋な「価値」の領域を救い

<sup>4</sup> たとえば、20世紀の宗教学・宗教哲学の出立点となったW. ジェイムズの『宗教的経験の諸相』では、宗教研究においてこの二分法を守ることが重要だと指摘される。「宗教的性向とはどんなものか? という問題と、宗教的性向の哲学的意義は何か? という問題とは、論理的な見地からすると、2つのまったく異なった種類の問題である。……最近の論理学書では、いかなる事柄についても、質問に2つの種類が区別されている。第一は、その本性は何か? いかにしてそれは生じたのか? その構造、起源、歴史は何か? という質問である。第二は、ひとたびそれが存在するにいたったからには、その価値、意味あるいは意義は何であるか? という質問である。前者に対する解答は、存在判断あるいは存在命題の形で与えられる。後者に対する解答は、価値命題、ドイツ人のいわゆる価値判断 *Werturteil* である。あるいは、なんなら精神的判断と呼んでもよいものである。どちらの判断も、一方から他方を直接に演繹してくることはできない。両者はそれぞれ異なる知的活動に由来するものであり、精神は、はじめ両者を分離しておいて、その後で両者を加え合わせるという方法によってはじめて、両者を結合するのである。宗教の問題では、この二種類の質問を区別することは特に容易である。いかなる宗教的現象も、それぞれ歴史をもっており、それに先立つ自然的な現象から派生してきたものである。こんにち聖書の高等批評といわれているものは、初代教会においてあまりにも無視されていたこのような存在論的な観点から聖書を研究しようとするものにほからならない。いったい、いかなる伝記的な条件のもとに、聖書の作者たちはそれぞれの記録を編んで、聖書の完成に寄与したのか? ……これらのことは明らかに歴史的事実に属する問題であって、これに対する解答が、さらにそれ以上の問題を、つまり、そのように成立の事情を明らかにされたそのような書物が人生の指針や啓示としていかに役立つか、という問題を、ただちに解決しようとは思えないのである。」(W. ジェイムズ『宗教的経験の諸相』(上)、舛田啓三郎訳、岩波文庫、1969年、16-17ページ。James, William, 1902, *The Varieties of Religious Experience*, in *The Works of William James*, Cambridge and London, Harvard University Press, 1985, pp.13-14)

<sup>5</sup> たとえばケインズの『確率論』序言を参照。「一読すれば読者はお分かりであろうが、筆者はW. E. ジョンソン、G. E. ムーアおよびバートランド・ラッセルに、すなわちケンブリッジに多大な影響を受けた。ケンブリッジは、ヨーロッパ大陸の著述家たちに負うところが多いとはいえ、依然としてロック、パークリおよびヒューム、さらにはミルやシジウィックなどと続く、学説の相違にもかかわらず何よりも事実を優先させるという点で一致する人々によって代表される、英国の伝統を今なお継承する直系である。彼らの研究対象は、まさに科学の一分野なのであって、散文の著述家が理解されたいと念じて書いた想像上の産物ではない。」(ジョン・メイナード・ケインズ『確率論』『ケインズ全集』第8巻、佐藤隆三訳、2010年。)

<sup>6</sup> G. E. ムア『倫理学原理』泉谷周三郎・寺中平治・星野勉訳、三和書籍、2010年、「はしがき」、iページ。Moore, George Edward., 1903, *Principia Ethica*, revised edition, with the Preface to the Second Edition, and other Papers, ed. by Thomas Baldwin, Cambridge University Press, 2000(revised edition), introductory remark on the back cover.

<sup>7</sup> ケインズ「若き日の信条」宮崎義一訳、『ケインズ ハロッド』中公バックス世界の名著 69、宮崎義一、伊東光晴責任編集、中央公論社、1980年、112ページ。

取ろうとして「自然主義的誤謬」という批判を掲げて価値と事実の二分法を推進したのに対して、限界革命以降の英国の経済学者たちは、むしろ価値の主観性から事実の客観性を救い取ろうとしてこの二分法を方法論の基礎に据えた、ということだった。自然の中に価値的なものを読み込んで価値を自然的事実か形而上学的実在によって定義しようとする学的態度を「自然主義的誤謬」と呼んで激しく批判したのはムーアの『倫理学原理』だった<sup>8</sup>。ムーア以来、英米圏の分析哲学の潮流の中では、事実と結びついた価値や規範についての議論を離れて価値に関する概念（good や right などの語の使用）を吟味するメタ倫理学が隆盛となる<sup>9</sup>。

清水の批判は、事実と価値の二分法によって進むことができる道の大半は、20世紀の四分の三のうちにだいたい踏破してしまったのではないかと、その間、この二分法のために倫理学は（そしておそらく経済学も）多くを得た反面、多くのものを得られずにきてしまったのではないかと、ということであろう。現代はこの二分法が限界に達していて、価値や価値と対比される事実を扱うとされる諸学（19世紀までの道徳哲学、現代の倫理学、経済学、経営学、政治哲学、社会学、法哲学、宗教学等々）にとってあらたな方法論的吟味が必要となっているのではないかと、という問題提起が清水の『倫理学ノート』の記述の背後にある。事実と価値の二分法による思考の限界が問われているというのが、20世紀後半四分の一の問題状況である。

こうした状況の中、20世紀最後の年になされた講演で、事実と価値を厳密に分離する二分法という発想は崩壊していると宣言したのはH. パトナムである<sup>10</sup>。パトナムが事実と価値の二分法を批判する際に依拠したのが、事実と価値は分かちがたく結びついているとするデューイの自然主義哲学だったことは示唆的である。デューイは、自分自身の立場を「経験的自然主義、または自然的経験主義、または『経験』を通常の意味にとって自然主義的ヒューマニズムと呼ばれうるような、ここに提示した哲学(the philosophy here presented may be termed either empirical naturalism or naturalistic empiricism, or, taking "experience" in its usual signification, naturalistic humanism)」<sup>11</sup>と呼んでいる。W. ジェイムズやベルクソンとともにデューイにも多くを負っていると言うホワイトヘッド(PR xii. 邦訳 iii)の自然哲学・形而上学も、事実と価値を分かちがたくできないという、デューイと同じ自然主義の哲学の立場に立つ。20世紀初頭のケンブリッジで道徳哲学の系譜からメタ倫理学と近代経済学が分枝していき、事実／価値の二分法が強力な方法論的基礎として確立されたその時期に同じ思想風土の中にいたホワイトヘッドは、その後、価値が内在する事実の論究に基づく形而上学体系を目指すようになるのである。

### 3. 事実の事柄において実現される固有の価値

ホワイトヘッドにとっては、デューイと同様に、「自然」は、広い意味で人為の営みも含んだ大きな営為であり、そこにおいて価値や目的といった「形而上学的な」実在がそのつど特定のかたちで実現する営為であ

<sup>8</sup>ムーアは「自然的対象に照らして善が定義されうる」とする倫理学を「自然主義的倫理学」と呼び、また、「善」を「超感覚的実在界に存在するとただ推論されるだけの対象」に照らして定義しようとする倫理学を「形而上学的倫理学」と呼んで、この2つが共通して犯しているのが「自然主義的誤謬」だとする（G. E. ムア、前掲書、151ページ。Moore, G. E., 1903, p.90）。このとき、「自然主義的」とは、「善」を何らかの「自然的存在」あるいは「形而上学的存在」と同一視するような態度を意味する。一方、ムーアは「自然」を「自然科学の主題となるもの」としている（G. E. ムア、前掲書、152-153ページ。Moore, G. E., 1903, pp.91-92）。つまりムーアの用語法では、自然科学の主題となるものが「自然」と呼ばれる一方、価値と存在の同一視が「自然主義的」と呼ばれる。

<sup>9</sup>ムーアによる事実と価値の厳密な区別が及ぼした影響について、清水は次のように述べている。「二十世紀の倫理学の出発点にはムーアの『倫理学原理』が立っている。それは、一方において、当時のケインズたちをベンサム主義から解放するという役割を果たすと同時に、他方において、現代の倫理学の問題および方法を大きく決定するものであった。それ以来、倫理学は、ベンサムに始まる功利主義への恐怖と敵意によって支えられることになり、「自然主義的誤謬」というのが、倫理学者たちの共通のスローガンになった。彼らは、人間の内外に互る自然的事実および事実判断から善の直覚を守ろうとした。それを守ろうとした時、彼らは、人間の欲求、複数の欲求の衝突としての倫理的状況、倫理的状況における選択や決定などの問題をすべて投げ捨てて、倫理的用語の言語的分析という仕事の中に自分たちを閉じ込めた。しかし、当然の話であろうが、good や right を初めとする倫理的用語の分析を続けているうち、二十世紀の倫理学は、日を追ってトリヴィアルなものになって行った。」（清水幾太郎『倫理学ノート』講談社学術文庫、2000年（1972年）、119ページ）

<sup>10</sup>パトナム、前掲書。Putnam, 2002.

<sup>11</sup>Dewey, John, *Experience and Nature*, Dover Publications, 1958, p.19.

る。このような事実と価値の融合の出来事を定式化するような形而上学の構築に取り組んだ後期のホワイトヘッドが、ロンドンに建設されたチェアリング・クロス鉄橋を引き合いに出しながら、価値を実現する事実の事柄としての「自然」について語っている典型的な箇所がある。少し長いが、ホワイトヘッドが事実と価値をいかに取り扱っているのかを知るために、その箇所を見ておこう。

「また、単なる物質をむき出しの無価値なものとする考え方(the assumption of the bare valuelessness of mere matter)は、自然美や芸術美の取り扱いに敬虔さを欠く風潮を導いた。ちょうど西洋世界の都会化が急速な発展を示し始め、新しい物質的環境のもつ美的性質を綿密かつ熱心に考察することが必要になったとき、それまでの美的観念は見当違いであるとする説が隆盛を極めた。工業の最も発達した国々では、芸術は児童に類したものとして取り扱われた。19世紀半ばにおけるこのような精神状態を示す著しい例はロンドンで見られる。すなわち、テムズ河がうねりながらこの都市を貫流している、その河口の素晴らしい美は、美的価値をまったく顧慮されずに建設されたチェアリング・クロス鉄橋によって、気まぐれにも毀損されたのである。

この場合2つの悪が見られる。1つは、各有機体とその環境と結ぶ正しい関係を見無視することである。いま1つは、究極目的を考える際には考慮に入れなければならない環境の固有な価値を見無視する習慣である。(SMW 196. 邦訳 261-262)

「環境の固有の価値」を感受し、享受し、評価するような自然の直接経験の感覚が失われつつあるのが近代であるという批判的意識がホワイトヘッドにはあった。ある事物や出来事がどのような価値を実現するかを問うことは、それがどのような環境におかれたどのような有機体なのかを問うことである。彼は次のように述べている。

「何よりも必要なタイプの一般性は、価値の種々相の味得である。つまり、美的感性の発達である。単なる実際家の大まかに分けた価値と、単なる学者の細かく分けた価値との間に位置する、何ものかがある。双方ともその何ものかを見逃している。この2組の価値を合わせても、その見逃されたものは得られない。求められているのは、それ自身の固有な環境に在る有機体の達成した、生きた価値の、かぎりない種々相を評価することである。」(SMW 199. 邦訳 266)

個々の事実において創発する諸価値を、それらが影響しあって織り成す全体的な価値との関連において見出し評価していくことが、有機体の哲学の視座である。ホワイトヘッドはさらに続ける。

「太陽について、大気について、地球の自転について、すべてのことを理解したとしても、なお日没の光耀を味わい得ないこともある。ある事物の具体的な達成形態をその現実性において直接に知覚することは、何ものにも代えられない。われわれが欲するのは具体的事実であり、しかもその事実の尊さにあずかって力あるものが強く照らし出されているかたちにおいてである。」(SMW 199. 邦訳 266)

ここに、ホワイトヘッドがその一般性の探求を通して抱き続けた「信念」が示されている。それは、「有機体とその固有の環境のうちにあつて実現するかぎりない価値の種々相を評価する」という美的な価値のセンスをもって、近代科学に匹敵するような広大な一般性と整合性をもった実在の論理を探求する、ということである。彼は、自然の具体的事実を相互に関し合う「出来事」の相対性や推移やリズムとして論究した彼自身の中期科学哲学を土台にして、後期の形而上学を体系化していく。これに対して、科学および近現代の教育は、価値の実現形態としての事実という結びつきを切り離している、というのがホワイトヘッドの批判で

ある。

「私が謂わんとするのは、われわれは個々の事実を、それらに創発する価値が影響し合っているままに(in their full interplay of emergent values)、具体的に味得する習慣を強めようとせず、ただ単に、さまざまな価値が影響し合っているというこの面(this aspect of the interplay of diverse values)を無視するような抽象的形式ばかりを重んじているということだ」(SMW 198. 邦訳 264)

個々の事実のうちに創発するさまざまな価値が織り成す意味や情感に満ちた世界の「具体的な味得」(concrete appreciation)を捨てて、価値を捨象した事実の認識を最も具体的なものと見なすが、「具体性を置き違える誤謬」である。彼の後期形而上学の体系的な思索には、この「誤謬」概念が示す存在と認識のあり方への洞察が浸透している。そこで、次に、この「具体性を置き違える誤謬」と「価値と事実の結びつき」について概観することにする。

#### 4. 事実の解釈としての知

ホワイトヘッドは、価値判断を一切含まない、むき出しの事実についての単なる知識といったものは、私たちの思考から追放すべき高度な抽象だとする。後期形而上学 3 部作の最後の著作『観念の冒険』の冒頭で、彼は次のように述べている。

「観念の歴史を考察する際、『単なる知識(mere knowledge)』という観念はわれわれの心から放逐されるべき高度な抽象だと、私は主張する。知識には、いつでも情緒や目的という付随物がついている。」(AI 4 邦訳 5)

哲学や科学において、情緒や目的、あるいは価値判断や意味が伴わない「むき出しの事実」の直接的な認識という考えを念頭に置くことは、「具体性を置き違える誤謬」に陥る隙を生むことになる。ホワイトヘッドは、「理論は事実に基づいて立てられる。また逆に、事実についての報告は徹頭徹尾理論的な解釈で貫かれている。」と述べて、解釈と不可分の事実の報告の例として、「外国の宮廷に駐在する公使」が、「自分は大臣に会見した。大臣はかなり感情をあらわにして、非常に明確に、さしせまった危機に対処しようとする施策を説明した」といった報告をするケースを挙げている。しかし、この「公使」の「視覚による直接の観察」がかかわっていたのは、「動いている色のついた形——『何だろうと思わせる形』(questionable shapes)——という視覚像」であり、「聴覚による直接の観察」がかかわっていたのは、絶えず変化するある音色の音の聴取である。先の報告は、これらの「いわゆる『むき出しの』事実(the so-called 'bare' facts)」を解釈したものである。「同時的な証拠(contemporary evidence)は同時的な解釈(contemporary interpretation)であって、これらのむき出しで感覚されるもの(these bare sense)とは別の与件を想定することを含んでいる」とホワイトヘッドは言う(AI.3-4、邦訳 4)。

ある言明が依拠するエビデンスは、たとえ直接の経験ではあっても「むき出しの事実」ではなく、すでに解釈である。さらに後の時代になると、たとえば歴史家が「自分自身の理論的判断にしたがって、かつての同時的な諸観察のなかから選択する」ようなことがあるが、そのときその歴史家は「その同時的な諸観察者を批判し、その同時的な証拠について自分自身の解釈を下す」(AI.3-4、邦訳 4)。

端的で頑固な事実、たとえば、私が今こうして皆さんにホワイトヘッドの話をしている、ということも、このように言った時点で、同時にいくつもの解釈が入っている。しかし、ホワイトヘッドが主張しているのは、解釈が加えられる以前の「いわゆる『むき出しの』事実」、つまり価値も意味も目的も情緒も混入していない純粋な事実の事柄などといったものを想定して、これをもっとも具体的なもの、厳密な科学の対象とな

るものと思うのは、学的方法にとって「具体性を置き違える誤謬」だということである。

解釈付きの経験から、それらの解釈を一つずつ丁寧にはぎとっていき、最初の直接的な知覚、たとえば、「動いている色のついた疑わしい形という視覚像」や「絶えず変化するある音色の音」等々に辿り着くことは、さまざまな条件が揃えば可能だろう。しかし、このようにして解釈をはぎとられたものが、意味や価値や情緒や目的を脱色された「むき出しの」事実であり、したがって「解釈」だの「先入観」だの「主観性」だのを排した経験のもっとも具体的な相だとするような学的態度については、ホワイトヘッドは厳しく戒めている。そのように意味や価値や目的等々を脱色された知識は、経験の具体相への肉迫ではなく、高度な抽象化の産物である。注意しなければならないのは、この誤謬に言及することで、ホワイトヘッドは、意味や価値を脱色された「事実」の認識というものがまったく不可能だとか、そういう認識はすべて誤謬だと言っているわけではないということである。解釈された要素を捨象して「むき出しの」事実と称するものを取り出してきて、これこそがほんとうの事実、具体的な事実だとするような科学的方法論が取りがちな、抽象化されたものを具体的なものと見なす態度が「具体性を置き違える誤謬」だということである。

## 5. むき出しの事実、単なる存在の異様さ

「具体性を置き違える誤謬」に進む前に、「いわゆる『むき出しの』事実」について触れておこう。私たちの経験の中には、ときおり、意味や価値を脱色されてただむき出しの事実だけが現前するような瞬間がある。それは、何か異様で病的な経験ではあるが、方法論上の誤謬といったものではない。その一例を見てみよう。『アウトサイダー』で知られるコリン・ウィルソンは、サルトルの『嘔吐』をホワイトヘッドの象徴論によって解釈するという読み方を提示している。『嘔吐』の中の有名な一場面、主人公の青年ロカンタンが、公園のベンチに腰かけていて、ベンチの足元にあるマロニエの木の根っここの節くれだってねじれた塊を見ているという場面である。

「つまり、私はさっき公園にいたのである。マロニエの根は、ちょうど私のベンチの下で、地面に食いこんでいた。……そのとき私はあのひらめきを得たのである。」<sup>12</sup>

ロカンタンに起こったのは、「むき出しの」事実の現前である。サルトルはこれを「むき出しの塊」、「物の生地そのもの」であるようなむき出しの「存在」と呼ぶ。

「私は思わず息を呑んだ。……不意に、存在がそこにあった、それは火を見るよりも明らかだった。存在はとつぜんヴェールを脱いだのである。存在は抽象的な範疇に属する無害な様子を失った。それは物の生地そのもので、この根は存在のなかで捏ねられ形成されたのだった。と言うよりもむしろ、根や、公園の鉄柵や、ベンチや、禿げた芝生などは、ことごとく消えてしまった。物の多様性、物の個別性は、仮象にすぎず、表面を覆うニスにすぎない。そのニスは溶けてしまった。あとには怪物じみた、ぶよぶよした、混乱した塊が残った——むき出しの塊、恐るべき、また猥褻な裸形の塊である。」（サルトル『嘔吐』[新訳] 鈴木道彦訳、人文書院、2010年、212-213ページ）

サルトルが描くロカンタンの離人症のようなマロニエの根っこ経験に対し、コリン・ウィルソンは、ホワイトヘッドが「まさしくこの問題を扱っていた」と言って、『象徴作用』から次の叙述を引用する<sup>13</sup>。

「イングランドの首相ウィリアム・ピットが……死の床にあったとき、彼は次のように呟いた——『われ

<sup>12</sup> サルトル『嘔吐』[新訳] 鈴木道彦訳、人文書院、2010年、211ページ。

<sup>13</sup> コリン・ウィルソン『アウトサイダーを超えて』中村保男訳、竹内書房、1966年、133ページ。



われは何という陰なのか。何たる影を追い回しているのか』と。彼の精神は突然、因果の有効性に対する感覚を失ってしまい、感覚表象(sense-presentation)の中で過ぎゆく世界の無味乾燥たる空虚さに比べて、自分の人生を包んでいた感情の強烈さの思い出によって照射されたのである。」(S 48. 邦訳 133)

ロカンタンやウィリアム・ピットが経験するのは、意味づけも解釈も剥奪されたむき出しの事実の事柄である。それは、因果の有効性を失ってただ直接的に現前しては過ぎ去っていくだけの世界である。この意味喪失の世界の空虚さにロカンタンはめまいを覚え、ウィリアム・ピットはそれまでの苦悩の日々の強烈な感情に、その感情の対象がないままに、急に襲われる。ホワイトヘッドは、「疲れたときには、突然の弛緩が訪れて、世界の単なる現前的な側面がその空虚さの感じでもって人を圧倒する」(S 48. 邦訳 133)と言う。ホワイトヘッドは、この空虚さの経験が、価値を脱色され意味を剥奪された「いわゆる『むき出しの』事実」であって、リアリティの具体性を真に開示する経験などではないと知っていたとコリン・ウィルソンは指摘する<sup>14</sup>。

一切の解釈を入れる前の、価値や意味から切り離された「むき出し」の事実がまず存在するのではない。直接的に現前する感覚表象の世界に、後から因果の有効性によって、原因とか目的とか前後の文脈とか意味や価値が付与されるのではない。ホワイトヘッドによれば、「まず初めは経験の因果的側面が支配的であって、次いで感覚表象がその機微を獲得していく」(S 49. 邦訳 133)。事実を意味や前後の文脈の中に置くような因果の有効性がまずあって、その影響連関の中で、直接的に現前する世界の諸事物にそれぞれの固有の意味や相互連関の機微が与えられていく。言い換えると、因果の有効性という意味の連関がある中で、個々の出来事が直接的に現前する事実として生起していくのである。ホワイトヘッドは「因果の有効性」(causal efficacy)に「現前の直接性」(presentational immediacy)が重ねられていくことを「象徴的関連付け」(symbolic reference)と呼んで、認識論的な論究の主題とする(『象徴機能』および『過程と実在』第2部第8章)。

「いわゆる『むき出しの』事実」なるものの現前は、疲労や病気で弛緩した瞬間の特異な経験である。むしろ私たちの日常的な直接経験の世界は、直接的に現前する事実が諸々の因果的な影響連関の中に位置づけられて、意味や価値や情緒を帯びた事実として経験されている。科学的探究においてこうした意味連関の中から「むき出し」の事実だけを抽出するとすれば、それは、具体性への接近ではなく、高度な抽象化であるといわざるをえない。意味や価値や情緒や目的を捨象した端的な事実そのものを指定することは、「具体性を置き違える誤謬」の1つの典型だと言える<sup>15</sup>。

<sup>14</sup> コリン・ウィルソン、同所。

<sup>15</sup> ホワイトヘッドは『科学と近代世界』において「具体性を置き違える誤謬」を提示する際に、物質が空間の一点、時間の一瞬時に「単に位置を占める(simple location)」(SMW 49. 邦訳 65)という17世紀の近代科学の物質観・時空観と、「(実体)と性質という2つの相関的な範疇(the two correlative categories of Substance and quality)」(SMW 51. 邦訳 69) (あるいは実体—属性の範疇)の2つを例示する。価値/事実の二分法については、そこでは直接的な言及はないが、実体—性質の二分法を批判する中で、デカルトやロックの第一性質と第二性質の区別を批判し否定する。その論法は事実/価値の二分法の批判に通じる。また、ホワイトヘッドは「具体性を置き違える誤謬」が17世紀にはじまる近代科学だけに限定されないことを示唆して、「もちろん、単に位置を占めるということと同様に、実体と性質は、人間精神がきわめて自然に抱く観念である。それはわれわれがものを考える際の思考形式であり、このような思考形式がなくては、日常すぐ使えるさまざまな観念を得ることができないだろう。このことはまったく疑いの余地がない。」と述べて、次のように続けている。「ただ1つの疑問はこうである。われわれがこれらの概念によって自然を考察する場合、どのように具体的な考え方をしているか。私の謂わんとするところは次のとおりである。われわれは自分に対して直接の事実の事柄の簡略版を贈っているのである(we are presenting ourselves with simplified editions of immediate matters of fact)。この簡略版に含まれているもとの材料を調べてみると、実際それらは高度の抽象によって精巧に組み立てられた論理的構成としてのみ、正当化されることを見出すだろう。もちろん、個人の心理からみれば、無関係な枝葉末節と思われるものを抑圧するという大雑把な出来合いの方法(the rough and ready method of suppressing what appear to be irrelevant details)によって、さまざまな観念に到達する。しかし無関係なものこのような抑圧を正当化しようと企てるなら、われわれがそれについて語っている諸事物(entities)に対応した、[抑圧されずに]残っている諸事物が有ることは有るが、このような諸事物は高度に抽象的なものだ」と気づくだろう。」(SMW 52. 邦訳 69-70)

## 6. 「具体性を置き違える誤謬」の2つの意味合い。

「具体性を置き違える誤謬」という概念には、私たちにとって、恐らく2つの意味合いがある。

まず、それは「研究者の倫理」程度のことを言っているのだ、といった理解である。「具体性を置き違える誤謬」という語は、ホワイトヘッド自身がこの考えに付与したさまざまな科学批判や認識批判等々の含意を捨象しても通用するような一般的な意味合いをもっている。この理解は大雑把だが間違っていない。「具体性を置き違える誤謬」は、科学の方法を用いる者にとって、いわば当たり前のことを言っている。方法には、それを用いる際の注意点があるが、「具体性置き違えの誤謬」というホワイトヘッドの考えは、どのような科学的方法であってもそれを用いる際にはいつでも留意しなければならないような注意書きである。認識は具体的事実を抽象化している。抽象化の方法や度合いはさまざまだが、肝心なことは、それが抽象化され概念化されたものであって、具体的事実そのものではないことを忘却してはならないということである。およそ科学者たる者で、これを踏まえていない者はいないだろう。当たり前のことが、方法論的な問題として厳密に問われるのは、「科学の」説明が現実の具体的な出来事の「真相」を開示していると素朴に信じ込んでいるといったような無反省な心のままで科学の新しい課題にチャレンジするときや、従来知られていた認識を未知の領域へと拡大していくといった、認識の境界線を拡張していくようなぎりぎりのところである。言い換えると、科学的方法を用いる者がこの誤謬の構造について特に自覚的になる必要があるのは、科学的な認識において真とは何かが問われるときである。あるいは、科学的認識をもとにして行為したり判断したり制度や方針を決定したりするときである。科学の命題や理論が「ほんとうのこと」を開示していると見なされるような場面では、この命題や理論は「すこぶる抽象的な論理的構成」に過ぎないことを意識し、その抽象物を具体的行為や判断に適用するための方法を慎重に吟味するべきである。「具体性を置き違える誤謬」というのは、大雑把に言えば、このような当たり前のことを含意している。

具体的だと思っている事柄も私たちの認識であるかぎりすべて程度の差はあっても諸要素を取捨選択され整理されて解釈された抽象物なのだから、「具体性を置き違える誤謬」に私たちはいつでも陥る危険性がある、それどころか、深刻さの度合いはさまざまだが私たちは大抵いつもこの誤謬に陥っているといえるだろう。私たちの日常の直接的な経験の中での発話においても、会話の中で互いに前提としている理解においても、膨大な費用をかけた実験室での観測においても、それらの観測結果を予測していたと理解されるような理論においても、私たちはこの誤謬に陥る危険性がある。そして、そのことを忘れて、高度な抽象化の産物を具体的なものの真なる認識と見なしてしまうような学的態度をホワイトヘッドは批判している。

このように見てしまうと、「具体性を置き違える誤謬」というのは、科学の方法論に対する批判としてはかなり粗削りな考えだということになる。科学に従事する者なら誰でも、この程度のことは分かっている。しかし、そのような粗削りで雑駁な考えであるために、ホワイトヘッドは具体性を価値が事実に受肉するという出来事の関係性の内に求めている、といった彼自身の哲学内部の事情からはある程度切り離して、科学哲学や科学方法論の一般的な議論の中で語ることもできる考えでもある。

このホワイトヘッド哲学の内部事情が、「具体性を置き違える誤謬」という考えの2つ目のポイントである。この第2の意味については、後述する。

第1の研究者の方法論的な倫理に関するざっくりとした考えといった意味での「具体性を置き違える誤謬」は、さらに、2つの方向に整理できるだろう。まず、これまでホワイトヘッドに即して見てきたように、研究者が直接的な観察や統計から得た与件を一定の理解の枠組みによって解釈した「理論」あるいは「命題」を、解釈されたものとしてではなく、どのような理解の枠組みにとっても共通の素材となるような「むき出しの事実」そのものだとする方向で、この誤謬を犯すということが考えられる。コモン・センスの伝統の中では、このような理解のための一定の枠組みは、理性があまねく共有するものとされてきた。ホワイトヘッドは、これまた後述するが、知の相対性と途上性を示すことで、理解のための一定の枠組みとしてのコモン・センスのような完結した普遍的な知の枠組みに私たちが到達するという考えを否定するとともに、そのような

理解の枠組みに対して提供される前の手付かずの素材としての「むき出しの事実」なるものもフェイクだとする。

もちろん、理解のための一定の枠組みは私たちの認識にとって必要不可欠である。ホワイトヘッドが批判するのは、自分たちのこの枠組みを最善のものとか唯一の正しさをもつものと見なしたり、この枠組みに対して提供される「むき出しの事実」なるものがあるとしたりする態度である。

研究者の倫理に関する標語といった意味での「具体性を置き違える誤謬」には、このような自然的な態度がもつ誤謬とは対照的な、もう一方の方向がある。つまり、このような常識的で庶民的な理解のための枠組みに対して、専門的な方法と技術に習熟した見地から「ほんとう」の理論や命題を提示するのが科学だという思い込みである。有機体の哲学を構築する以前の中期科学哲学の著作『相対性原理』では次のように言われる。すなわち、科学者（ラザフォードの名前が挙げられている）が分子を粉々に砕いたときにも、彼は分子や電子を見たわけではなく、一閃の光を見ただけである。彼の観察した閃光と彼が推理した分子の消滅との間にはたかだか推論的な対応関係があるだけである(R 61. 邦訳 65)。あるいは、彼が直接見たのはその閃光ですらなく、閃光が走ったことを示す計器の目盛や記録紙に印刷された一筋のインクだということも十分にありうる。コリン・ウィルソンは、この箇所を引用して、次のように続ける。

「そこで同じ科学者は『さよう、それが私の見た出来事（一閃の光）であるが、しかし、実際に起こったのは……』と言うであろう。そう述べることによって彼は世界を、実際に在るとおりの事物と、眼に見えるものとしての事物とにはっきり二分しているのだ。ホワイトヘッドはこれに抗議して言う——『こうして、自然は個々の経験を含むひとつの全体であり、それゆえわれわれは、リアルに在るとおりの自然(nature as it really is)と、純粹に心理的なものである自然の経験(experience of it which are purely psychological)とを区別することを退けなければならない。見かけの世界(apparent world)のわれわれによる経験が、自然そのものなのである。』(R 62. 邦訳 66)」<sup>16</sup>

私たちが経験する自然を「見かけの世界」と「リアルな世界」とに切り分けるような二元分裂論をホワイトヘッドは否定する。さらに、この「見かけの世界」の仮象ないしは虚偽に対して、「リアルな世界」で「実際に起こったほんとうの姿」を明らかにする理論や命題を提示するのが科学の務めだ、とするような思い込みをホワイトヘッドは退ける<sup>17</sup>。この思い込みこそ、『相対性原理』に続く、後期形而上学の最初の著作『科学と近代世界』において、第一の意味での「具体性を置き違える誤謬」として提示されるものである。

この「誤謬」が纏わりついているために、近代自然科学の「物質論的機械論」は「世界がひつつかんでしまった、あっても困るし、なくても困る一つの通念」(SMW 50. 邦訳 67)とまで言われている。近代科学は、

<sup>16</sup> コリン・ウィルソン『宗教とアウトサイダー』(下) 中村保男訳、河出文庫、河出書房新社、1992年、254ページ。ただし、後半のホワイトヘッドからの引用は Whitehead, A. N., 1922, *The Principle of Relativity with Applications to Physical Science*, Mineola: Dover Phoenix Editions, 2004, p.62 に依った。

<sup>17</sup> この事例に加えて、数理経済学会方法論分科会春季ジョイント・セミナーでの著者による発表のあと、次のような事例をどう解釈するのかという質問があった。すなわち、「たとえば原発事故で放射線被曝した人が、その瞬間には何も感じないとしても、その後明らかに体調の異変や発病を経験したとする。この場合、医学に基づく診断は、被曝したときに本人は直接経験において何も感じなくても、その体には分子レベルでの深刻なダメージがあったことを説明して、「あのときほんとうは放射線被曝していたのだ」等々と言明するのではないか。」このような質問に対して、ホワイトヘッドの議論に即して答えるとするなら、次のようになるだろう。すなわち、「本当に何があったのかに関する直接の経験は、現在のその人のめまい、嘔吐、発熱、疲労、苦痛、食欲不振、体重減等の体調の異変などであり、医師が語ることができるのは被曝の際に「ほんとう」には何があったかということではなく、現在までの診察や検査の結果が示すことと、被曝の際に起こったと推定できることとの間に非常に高い確度で因果関係が推定できるということである。あのとき、本人の直接経験においては何も感じなくても、「ほんとう」は被曝していたのだ、という言明を一切の保留なしで無批判に発することは、厳密にはできない。しかし、このように言明することが意味をもつ場面(裁判や交渉の場面、あるいはそのような言明による心理的治療効果やある程度の納得等が期待される場面、今後の同様のケースに備えての説明など)があることは確かであり、その点でこのような言明にはプラグマティックな意味があるといえる。」

物的要素が空間の一点、時間の一瞬時にシンプルに位置を占めるとし、世界とはその物質の瞬間的配列の継起であるとした。この「シンプルに位置を占めるという概念」はベルクソンの言う知性による「空間化」に等しいとホワイトヘッドは指摘して、物的要素のこのようなシンプルな位置づけあるいはリアリティの空間化に基づく科学の機械論的自然観は「きわめて具体的な事実をすこぶる抽象的な論理的構成のかたちで表現すること」(SMW 50-51. 邦訳 67)だと述べる。そこには、誰にでも分かる誤謬がある。これについてホワイトヘッドは次のように言っている。

「なるほど1つの誤謬があるが、それは単に抽象的なものを具体的なものと取り違える偶発的な誤りにすぎない。それは、私が『具体性を置き違える誤謬』(Fallacy of Misplaced Concreteness: 置き換えられた具体性の誤謬)と呼ぼうと思うものの一例である。この誤謬は哲学に大きな混乱を起こす種となっている。……ここで挙げた例では知性がこの陥穽に落ちこみがちなのは非常に一般的に見られる傾向だが、知性がこの陥穽に落ちこむのが必然的だというわけではない。」(SMW 51. 邦訳 67)

この種の誤謬を回避するには、科学的認識や判断が、どのような事象をどのように選択し強調して解釈しているのか、何を捨象し、どのような判断を行っているのかについて自覚的であるだけでよいとする解釈も成り立つだろう。「それは単に抽象的なものを具体的なものと取り違える偶発的な誤謬にすぎない」のであり、抽象化されたその理論や命題やそれらの構図が間違っていると言っているのではない(間違っていることもしばしばあるだろうが、それはこの誤謬とは別の問題だ)。言い換えると、科学者や科学の成果に触れる者は、科学の「方法」とその限界について、および科学の理論や命題がそのような「方法」に則っているということについて、自覚的であれ、といった研究者倫理をこの「誤謬」をめぐる考えは示しているという理解も、現代の研究者にとって十分に意味をもつだろう。

しかし、ホワイトヘッドは、はじめのうち、この「誤謬」が西欧の近代科学に特徴的なものと見ていたようであるが、やがて、この「誤謬」はより深刻なものではないかと思えるようになったのではないかと思われる。1925年に出版された『科学と近代世界』から1929年に出版された『過程と実在』にかけて、このような微妙だが重要な変化があったのではないか。つまり、この「誤謬」に陥っているのは近代科学の認識と探求の方法であって、それに対して批判的・自覚的なオルターナティブなものの見方に立てばこの「誤謬」を(程度の差はあれ)脱することができる、といった『科学と近代世界』での科学批判のトーンに対して、このオルターナティブなものの見方をより本格的に、形而上学体系として構築しようとする『過程と実在』では、この「誤謬」は近代科学に固有の問題ではなく、人間の認識の在り方、ひいては人間を含む万有の存在の仕方そのものに関わる問題だと理解されるようになっていたのではないか。言い換えると、この問題が示すような人間の認識の限界やその基本にある万有の関係性ないしはダイナミックなプロセスを論究することで、ホワイトヘッドの後期形而上学の最も基本的な着想が体系的に定式化され表現されていくようになったのではないか。

## 7. 近代科学の機械論的物質主義に対する批判

ここまでの議論を整理しよう。「具体性を置き違える誤謬」という語は、ホワイトヘッドが提示した語だが、この語が含意するところは便宜的に1つに分けられる。1つは、特にホワイトヘッドという固有名を冠しなくとも通用しているような、研究者の心得を示すような大雑把な意味である(ここではこれを「第一の意味」と呼んできた)。しかし、この語には、また違った意味の層がある。ホワイトヘッドの後期哲学においては、彼自身がこの語に独自の批判的な意味合いを込めている。

以下では、この語がホワイトヘッド哲学の中でもつ意味合いを考えてみたい(ここではこれを「第二の意味」と呼ぶことにする)。

ホワイトヘッドの後期形而上学の中でも、この「具体性を置き違える誤謬」という考えは、1925年の『科学と近代世界』での初出時と、1929年の『過程と実在』で再度登場する時とで、微妙に意味合いが変わり考察が深まっている。

科学的方法によって提示された命題や理論は、対象を抽象化している、といった一般的な意味での「具体性を置き違える誤謬」の議論（ここで、第一の意味と呼んできたもの）の背後で、このような科学の諸理論の個別的な「誤謬」のいわば共通の根として、自然科学がもっている「誤謬」がある。科学的方法に固有の事情ではなく、私たちの経験のあり方や私たち自身の存在の仕方に深くかかわっている、という洞察が、ホワイトヘッドの後期形而上学の中心的な議論に触れていく一つのきっかけとなる。このホワイトヘッド哲学の内部事情が、「具体性を置き違える誤謬」という考えの2つ目のポイントである。この考えが示す認識の構造は、ホワイトヘッドの後期形而上学全体に浸透している。私たちのいろいろな認識は、そのいろいろさの度合いに応じて具体的事実を抽象化している。この科学批判の観点を広げ、掘り下げながら、ホワイトヘッドは、具体的事実の認識プロセス＝抽象化された意識的把握の成立のプロセスを論究しつつ、彼のプロセス論の核心である「抱握」という概念を論究する。

ホワイトヘッドは、後期形而上学の形成期に当たる『科学と近代世界』から『過程と実在』にかけて、近代科学批判をベースとして、独自の形而上学を構築していく。「具体性を置き違える誤謬」という考えが最初に登場した『科学と近代世界』では、この語は近代科学の認識や探求が陥っている誤謬を指弾する語として提示される。ホワイトヘッドによれば、西欧の近代科学は、自然を（したがって万有を）、「無感覚、無価値、無目的」の非情な物質が均一に広がる空間の中の一点と均一に流れる時間の中の一瞬時にそのつどの場所を占めながら、数式によって表現される自然法則に従った軌道の上を「盲目的に」運動すると見なしている。このような基本的な自然観においては、価値や目的や情緒等々を捨象された「むき出しの事実」としての物質（の第一性質）が具体的なものとされる<sup>18</sup>。自然を没価値的な非情な物質の「血の通わない舞い踊り(bloodless dance)」<sup>19</sup>だとするような自然科学の基本的なものの見方に対する批判が、『科学と近代世界』の1つの主題であり、このような見方に対するオルターナティブな宇宙論の方向性を示すことが、もう1つの主題である。そして、そこで方向性を示されたこの新しい宇宙論を、自然科学に匹敵するような形而上学体系として提示しようとしたのが『過程と実在』である。「具体性を置き違える誤謬」は、人間のもとももっている認識や思考の限界に由来するということが、『科学と近代世界』においても示唆されていたが、これが含意するもの

---

<sup>18</sup> 『科学と近代世界』の第1章で、ホワイトヘッドは「以下の諸章において私は、ヨーロッパの知性が過去3世紀の間に身にまとっていた特殊な宇宙論の思想の浮沈の跡を辿ろうと思う」と述べて、20世紀に至るまでのこの3世紀の間に台頭した近代科学のものの見方について次のように述べている。「この期間全体を通じて固定した科学的宇宙論が存続している。この宇宙論は、配列が絶えず変動しながら空間全体に拡がっている、原理にまで還元し難い非情の物または物質を、究極の事実として前提している。そのような物質はそれ自体としては無感覚、無価値、無目的である。それは、その存在の本質から発生しない外的関係によって課せられた一定の軌道を進んで動いているにすぎない。私は、まさにこのような考えを『科学的物質主義(scientific materialism)』と呼ぶ。そしてまた、私は、まさにこの考えが、現在われわれの到達した科学の状態にまったくふさわしくないものとして、排撃するだろう。」(SMW 17. 邦訳 23-24)

<sup>19</sup> 自然は「血の通わない諸範疇の舞い踊り」ではない、とホワイトヘッドは言っている。「最後に、まだ議論されていない根本的な問題が残されている。それは、それによって宇宙のプロセスが理解されるような事物の根本的なタイプとはどういうものか、という問いである。われわれは、自然が、科学的精査のために単に諸活動とプロセスを開示しているのだ、ということには同意しているとしよう。このことは何を意味しているのか。そういう諸活動は、衰えて互いのうちへと消えてゆく。それらは、生起しては過ぎ去ってゆくのだ。そこで何が成し遂げられつつあるのか。そこで結果としてもたらされたのは何か。そこで成し遂げられもたらされる何かが、単に掛け算の九九表のごときものにすぎないということはない——偉大な哲学者の言葉を借りると、血の通っていない諸範疇の舞い踊りにすぎないようなもの(merely a bloodless dance of categories)ではありえない。自然は血潮に満ちている(Nature is full-blooded)。リアルな事実が生じているのだ(Real facts are happening)。」(MT 144. 邦訳 179-180)

ここで言われている「偉大な哲学者」とは、F. H. ブラッドリーのことであろう。ブラッドリーの『論理学の諸原理』には、「血の通っていない諸範疇のこの世のものとも思われぬバレエ(unearthly ballet of bloodless categories)」という言葉がある(F. H. Bradley, 1883, *Principles of Logic*, in *The Oxford Book of English Prose*, 1925, edit. by Arthur Quiller-Couch, Oxford at the Clarendon Press, pp.591). W. ジェイムズもブラッドリーのこの言葉に言及している。

についてのさらなる考察は『過程と実在』をまたなくてはならない。そこでの議論を追う前に、『科学と近代世界』において、この「誤謬」という語による批判を通じてホワイトヘッドが何を擁護しようとしたのかを見ておきたい。

## 8. 詩人の詩的直観と具体性

「具体性を置き違える誤謬」に関するホワイトヘッドの議論を要約すると、あらゆる認識は具体的なものをそれぞれの仕方や度合いに応じて抽象化している、ということである。このとき、「具体性」とは何を意味するのか。これは、ホワイトヘッド哲学の中でも、かなり怪しい魅力をもった論題である。さしあたっての答えは、事実と価値が一体化した直接経験の原初相、ということであり、これが思弁哲学の考究の出立点となる。ホワイトヘッドは、『科学と近代世界』第3章「天才の世紀」では、「具体性を置き違える誤謬」の典型としての「単に位置を占めること」と「実体一性質」の観念が示すような没価値的な非情の物質という自然観に基づいた近代科学を批判した。この批判によってホワイトヘッドが何を擁護し、どのような方向を目標としたのか。先に結論を見ておくと、ホワイトヘッドの主著『過程と実在』では、「有機体の哲学」における最も基本的な概念を示す「存在の範疇(The Categories of Existence)」の1つとして「(抱握)、あるいは〈関係性という具体的事実〉(Prehensions, or Concrete Facts of Relatedness)」(PR 22. 邦訳 36)という語が挙げられている。ホワイトヘッドは、さしあたって、具体性を諸出来事の「関係性(relatedness)」として理解し、この関係性をプロセスとして理解し、プロセスを「抱握(prehension)」という彼独自の概念で説明し、そうやって、価値と結びついた事実の成立を語る。これが、自然科学批判を通してホワイトヘッドが守り育てていこうとした基本的な自然観だといえるだろう。そこには、自然とはもろもろの唯一的な出来事が相互に関係し合いながら生成する中で、価値がそれらの事実のうちに受肉していくプロセスだ、というロマンティズムの世界観からの影響がある。コリン・ウィルソンは、『科学と近代世界』においてホワイトヘッドがロマンティズムの詩人たち、特にワーズワスとシェリーを論じた「ロマン主義的反動」の章に言及して、次のように言っている。

「ホワイトヘッドが『科学と近代世界』において試みているのは、詩人は正しく、科学者は間違っている、と主張することなのだ。ワーズワスが愛し崇拝した『自然』のほうが、ニュートンの語った『自然』よりも実在に近い。」<sup>20</sup>

『科学と近代世界』で初めて「具体性を置き違える誤謬」を語ったホワイトヘッドにとって、科学者の何かが間違っていたかということ、まさに、具体的事実を示す理論を提示したと科学者が自負したという点だった。より具体的な認識あるいはより具体的な経験は、詩人の詩作の中に語られている、というのが『科学と近代世界』のロマンティズムに関する章の主題である。コリン・ウィルソンはこの点を高く評価して、詩人が表現する直観のうちに具体性を求めるような新たな自然哲学の探求こそが「有機体の哲学」の本質だと言う。

「だが、ホワイトヘッドはそれで事は終れりとする気はない。シェリーやワーズワスのような詩人の洞察に対応する鉄壁の『科学的』自然理論を築きあげようと欲するのだ。これが彼の『有機体の哲学』の本質にほかならない。」<sup>21</sup>

かなり偏った読解だが、私はコリン・ウィルソンがここで示しているような読み方に概ね賛成する。ホワイトヘッドは、詩人の詩作において表現された詩的直観が、科学者の理論や命題や構図よりもより具体的な

<sup>20</sup> コリン・ウィルソン『宗教とアウトサイダー』(下) 中村保男訳、河出文庫、257 ページ。

<sup>21</sup> コリン・ウィルソン、同所。

ものに迫っていると。ホワイトヘッドの著作の中で突然に引用される詩人たちの詩句において、彼が具体性をどのようなものと見ていたのか、彼がなぜこれを考究の出立点に置いたのか、ということを理解する手がかりが示されている。端的に言って、詩人の詩作は、個々の事実において実現している固有のかたちの価値を詩人自身の固有で特殊な視点において享受し表現しているとともに、その固有なかたちにおいて表現された価値の普遍性をも有限の言葉の中で示唆しているからである。事実の事柄の成立において実現された価値が、事実から分離されずに表現されるとき、そしてその表現が、「客観的」で「偏見のない」「普遍的な」定式化ではなく、たとえばまさにその詩人のその固有の詩句として、表現する者の主観性だの偏りだの先入観だのパースペクティブの限定性だの言語の限界だのによる制限や特殊性を刻印された表現であるとき、これこそが、ホワイトヘッドにとって、より具体的なものへの接近（それでも抽象化は免れないにせよ）なのである。詩作その他の芸術表現において、特殊な視点からの特殊な表現のうちに、具体性へと接近しつつも、その単なる再生産ではないような新しさが創造的に表れている。このような表現が示すような微妙な動態あるいは構造に対して、自然科学に匹敵するような整合的で体系的な論理的表現を与えようとするのがホワイトヘッドの後期哲学の動機だったとコリン・ウィルソンは示唆している。

哲学的探究の動機や出立点はなかなか言葉にできない。それは、驚きと言われたり、好奇心と言われたりするが、直接経験の解明こそ、考究の出立点だとホワイトヘッドは言う<sup>22</sup>。そこには英国の経験論哲学の伝統とともに、W. ジェームズの影響もあるだろう。言葉になかなかできないような考究の出立点を示すものとしてホワイトヘッドが選んだのが、科学的認識ではなくシェリーやワーズワス、あるいはキーツなどの詩人や、宗教者の洞察だった。20世紀の当時までの科学には、どうしても足りないと思えるものがあるのに、それが足りないことに科学に従事する人たちはなかなか気づかない、しかし、それが足りないということが致命的なことに思える、というのが、ホワイトヘッドが数学基礎論や自然科学から、自然哲学・形而上学へと転向した最大の動機だったのではないだろうか。

## 9. プロセスとしての具体性

後期ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論は「有機体の哲学」と名づけられている。この哲学の方法は、私たちのそれぞれのパースペクティブで得られる特殊な直接経験という地盤から、「想像の一般化」を通して一般的な諸観念の論理的な体系を構築する、という思弁哲学の方法である。ホワイトヘッドによれば、「思弁哲学は、われわれの経験のすべての要素を解釈しうる一般的諸観念の、整合的で論理的で必然的な体系を組み立てようとする試みである」(PR 4. 邦訳 3)。それゆえ、思弁哲学の方法によって展開されていく「有機体の哲学」には、実在を十全に表現する一般的諸観念の論理体系を構築するという合理主義的な側面と、私たちのそれぞれのパースペクティブからの直接経験を出立点として、これを一般的諸観念の論理体系によって解釈するという、経験論的な側面との二面性がある。探求の出立点は直接経験であり、探求の第一の目標はそれぞれの直接経験を十全かつ整合的に解釈する一般的な論理体系を構築することであり、最終目標は、この一般的な論理体系をもって最初の直接経験を解釈することである。そのとき、事実と価値は一体のものとして評価され判断される。

私たちは具体的なものに満ちた世界にいるという実在論がホワイトヘッドの立場であり、この現実世界の直接的な経験が彼の思弁哲学の考究の出立点であるが、私たちの認識や言明はどうしても現実世界の具体性を抽象化せざるを得ない。しかし、彼は不可知論者ではない。確かに、具体的なものを具体的なままで認識

---

<sup>22</sup> ホワイトヘッドは、彼自身の「有機体の哲学」を思弁哲学と呼び、そこには「合理的側面(rational side)」と「経験的側面(empirical side)」があるとして(PR 3. 邦訳 4)、次のように述べている。「難点は、哲学の経験的側面のうちにある。われわれの与件は、われわれ自身を含む現実世界である。この現実世界はわれわれの直接経験の主題というかたちにおいて観察されるように広がっている。直接経験の解明は、どんな思想をも正当化する唯一のものであり、思想の出立点は、この経験の構成要素の分析的観察である。しかしわれわれは、直接経験の限定性を成している種々の細部によって、直接経験を明確で完全に分析することを意識しているのではない。」(PR 4. 邦訳 5-6)

したり言葉にしたりすることは誰にもできない。認識し言明する際にはどうしても抽象化や解釈が生じているのだが、しかし、ホワイトヘッドはそれらをはぎ取った「事実それ自体」のような不可知の存在を想定しているわけではない。客体的与件と認識する主体とが、互いに関わり合う前から（つまり経験に先立って）存在しているという構図そのものをホワイトヘッドは否定する。大雑把な言い方をすれば、私たちの直接経験に与えられた与件は確かに在るのだが、それは、いわば私たちに与えられた通りに、そして同時に私たちがそれを解釈してしまっている通りに、まずは受け取るしかない。それを受け取っていく中で、それを経験し解釈している「今、ここ」での私が生成する。私が在って経験が生じるのではなく、経験が生じる中で私が生成し、私の解釈が生成していき、そうやって私の意識が生成していくのである。「私が採用しているのは、経験が意識を前提としているのではなく、意識が経験を前提としているという原理である」(PR 53. 邦訳 89)とホワイトヘッドは言っている。これが、かなり大雑把に描いたホワイトヘッドの生成論の素描である。

このようなホワイトヘッド哲学の見方に立てば、経験も認識も私たちの存在も、同じ一つのプロセスであるということになる。私たちの経験は具体的なもののただ中で生起するが、私たちの意識はその具体的なものを抽象化し解釈しながら認識するのだ。そのプロセスの各段階で、たとえば対象をほとんど意識しないような日常生活の習慣化されたレベルで、あるいはふと気配を感じて注意をそちらに向けてみるといった意識的行為のレベルで、さらには準備を重ねて臨んだ瞬間における細心の注意を払っての集中的な行為のレベルで、はたまた科学的な測定や観察のレベルで、それぞれに応じて抽象化され解釈された事実を把握している。「誤謬」というのは、このようにして把握されたものが、それぞれのレベルに応じてそれぞれの方法で対象を選択し、強調し、抽象化し、意味づけ、解釈しているのだということをおぼろげに忘れて、把握された結果の方を具体的なものだと思ってしまうということである。

私たちは一回限りの出来事が生じては消えていく不可逆的な世界に生きている。ホワイトヘッドはこれを端的に「生きている自然(Nature Alive)」(MT 148. 邦訳 183)と呼んでいる。そこで生じては消えていく諸々の出来事の関係性からなる不可逆的なプロセスを相手取るのが科学であるが、近代科学は、そこから一定の方法で何かを切り取ってきて他を排除することで確実性を担保している。しかし、科学はその方法論によって、対象を選択し捨象し強調している。そのとき捨象されるのは、たとえば事実と不可分に結びついて成立する価値であったり、不可逆的なプロセスの唯一回性であったり、このプロセスの至るところで生じる無数の主体という観点の多元性であったり、あるいは科学的探究や理論の適用の動機となった個別的で切実な経験であったりする。科学者や科学に触れる者は、このことに自覚的にならなければならない、とホワイトヘッドは訴えている。

このプロセスのうちに、このように洞察し、このように認識する主体も巻き込まれている、ということが、直接経験を考究の出発点とするホワイトヘッドの思弁哲学の特徴である。直接経験においては「われわれの与件は、われわれ自身を含む現実世界である」(PR 4. 邦訳 5)。ホワイトヘッドの主著のタイトル『過程と実在』つまり、『プロセスとリアリティ』(Process and Reality)というフレーズは、この唯一回的な、生じては消え去っていく出来事の総体としての世界のリアリティをプロセスと理解する、という彼の基本的な洞察を示している。「リアリティはプロセスである(The reality is the process)」(SMW 72. 邦訳 97)というこの洞察からホワイトヘッドは、このような洞察をしている認識主体そのものをも含むこのプロセスの論理的な解明を行う。

「有機体の哲学」では、その解明の最も基本的な定式化は、「説明の範疇」の第一に掲げられた「現実世界はプロセスであり、プロセスとはアクチュアル・エンティティの生成であるということ(That the actual world is a process, and that the process is the becoming of actual entities.)」(PR 22. 邦訳 37)という言葉である。

「アクチュアル・エンティティ」とは、さしあたって、ここでは、「世界がそれから構成されるような究極の実在物(final real things)」(PR 18. 邦訳 30)、「究極の実在ないし真なる事物(Final Realities, or *Rēs Verae*)」(PR 22. 邦訳 36)を意味する語として導入されたホワイトヘッド独自の術語である。『観念の冒険』では、「経



験の契機」(occasion of experience)と言ひ換えられている。神も、はるか彼方の空虚な空間のごく瑣末なひと吹きのパフも「アクチュアル・エンティティ」だとホワイトヘッドは言う。この言葉を『過程と実在』で導入する際、ホワイトヘッドは、哲学的思考は「単なる意識」や「単なる私的感覚」や「単なる情動」等々といった非常に抽象的な観念にたずさわってきた結果、「具体性を置き違える誤謬」に巻き込まれることになったと述べて、「アクチュアル・エンティティ」や「抱握」や「ネクサス」といった観念においてなされた「有機体の哲学」の構築の努力は、「哲学的思考をわれわれの経験における最も具体的な要素に基礎づけることである」と宣言する(PR 18. 邦訳 29)。

この「アクチュアル・エンティティ」という術語は、ホワイトヘッドの体系の内部でのみ意味をもつような、高度に抽象的な語だが、ホワイトヘッドは、この術語を中心概念とする「有機体の哲学」の体系構築が、「哲学的思考をわれわれの経験における最も具体的な要素に基礎づけること」だと言う。抽象的な知をいかにして具体性に基礎づけるのか。ホワイトヘッドの手法は、2通りあるように思われる。

1つは、具体性を、異質なものや多様なものの混沌や未分化な状態を含んだ雑多な諸与件とそれらの直接的な受容という経験のうちに見出そうとする方向である。そして、そこから、もう1つの、「実体」ではなく「関係性」のうちに見出そうとする方向が出てくる。

ホワイトヘッドは、「アクチュアル・エンティティ」という高度に抽象化された概念を具体性に基礎づけるために、この語の意味する事態を、静的な「実体」としてではなく、混沌とした未分化の与件から秩序だった認識が生成するプロセスとして分析する。「アクチュアル・エンティティ」とは生成する1つの「出来事」あるいは「経験の契機」であり、その出来事は、直接経験における諸要素がその雑多な状態の中で1つの経験を構成していくというプロセスへと分析される。抽象化された概念の単純明快さや論理的整合性に比して、直接経験される現実の世界は多かれ少なかれ乱雑で混沌としている。ホワイトヘッドは、この混乱の中でさまざまなものが関わり合ったり反発し合ったりすれ違ったりしながら、そこから1つの整合的で秩序だった認識が成立していくというそのプロセス、認識される客体と認識する主体とのあいだで成立していくそのプロセスこそが、もっとも具体的なものだ、と理解している。

世界の多様性をホワイトヘッドは「離接的(選言的)多様性(disjunctive diversity)」(PR 21. 邦訳 34)と表現するが、それは個々の独立した要素が整然と配置され秩序だった世界としてまず経験されるのではない。直接経験の事実を考究の出立点とするホワイトヘッド<sup>23</sup>は、ジェームズの「ざわめく(buzzing)」という言い回しを借りて、次のように言う<sup>24</sup>。「われわれはともにある被造物たちの民主主義の直中で、ざわめく世界(a buzzing world)のうちに自らを見出す。」(PR 50. 邦訳 84)この世界は、自然であっても社会であっても、直接経験の原初相においては雑然としたものとして経験される。「社会的な構成物は、諸特徴のごった返し(a welter of characteristics))を例証している。いかなる事実も、単にかくかくしかじかのもの(merely such-and-such)ではない。」(AI 234. 邦訳 323)私たちの人間的経験は、その漠然とした巨大なざわめきやごった返しから、統一的で秩序づけられた「これこれしかじかの」経験が生成していくプロセスの中にある。

私たちが直接経験する世界は、全体として、ざわめき、うねり、ごった返していて、その1つ1つの要素が判然とせず、それらをそれぞれに名指すことのできない渾然とした何ものかであり、そこから明晰な意識

<sup>23</sup> 有機体の哲学における探究の出立点は、直接経験の事実である。「直接経験の解明は、どんな思想をも正当化する唯一のものであり、また思想の出立点は、この経験の構成要素の分析的観察である。」(PR. 4)このような有機体の哲学の経験論的性格をホワイトヘッドは、有機体の哲学の「経験的側面」(PR. 3)と呼び、その意図はすべての経験に適用可能な十全な解釈の図式を構築することだとして、整合的な論理体系を意図するという「合理的側面」(PR. 3)とともに有機体の哲学を動機づける原点としている。次の拙論を参照。村田康常「有りえないものの実在—ホワイトヘッドにおける逆説の論理—」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編、『プロセス思想』第12号、2006年、65-86ページ。

<sup>24</sup> この「ざわめく(buzzing)」という語にホワイトヘッドは特に注をつけて、「この形容語句は、もちろん、ウィリアム・ジェームズから引用されている」と注釈している。ジェームズのよく知られた語は、“one great blooming, buzzing confusion”という表現で、『心理学原理』に見られる。William James, *The Principles of Psychology*, I, 1890, *The Works of William James*, ed. by Frederick Burkhardt, Harvard University Press, 1981, p. 462.

における整合的で分節化された秩序ある世界という認識が成立していく。しかし、直接経験の世界には、整合的な秩序の認識においては捉えることのできない漠然とした広大な領域が余剰として残されている。「経験の焦点には比較的明瞭さがある」(ESP 122. 邦訳 147)が、そこには「解釈」あるいは象徴作用による意味付与がなされている。それらのおかげで、私たちの通常の知的経験においては明瞭に意識された経験の与件が整合的な順序や配置で生起するが、「しかしこの明晰さの分別は半ば影なる背景へと導く」(ESP 122. 邦訳 147)。経験のうちには、「常に、ある漠然とした彼方というものがある、それはその細部についての透察を待ち望んでいる」(MT 6. 邦訳 15)のであり、この彼方の半影は、「われわれがそこから派生し、そこに立ち返るような薄暗い背景」(ESP. 123. 邦訳 147)として、明瞭な意識の抽象の背後に沈んでいるのである。「われわれの意識的経験——知覚的経験であろうと概念的経験であろうと——の薄暗い背景(dim background)に横たわる」ような広大な領域があり、そのような「彼方の暗闇には、われわれを生じさせる宇宙である茫漠たる団塊(vague mass which is the universe begetting us)が絶えずおぼろに浮かんでいる」(ESP 123. 邦訳 147)。近代科学およびその習得を目的とした近代の教育は、「漠として薄暗い彼方を望む展望への共感の欠如」(SMW 59)によって、思索の原初における全的で生き生きとした直接的な経験の深みから湧出し、その深みを究めようと立ち返るような理性の躍動と緊張を失った。科学も、形而上学あるいは哲学も、本来、こうした躍動のうちにあるということを示唆する。哲学にとっても科学にとっても、「問題は、われわれが漠然と知っていることを正確に分別すべきだということ」(ESP 122. 邦訳 147)であり、こうした深みを探求する理性の冒険と、そこから一般的な諸観念の合理的構図という「希薄な空気」(PR 5. 邦訳 6)のうちへと飛翔する想像的一般化とによって、定着した論理体系の完結性と狭隘さを打破することである。

ホワイトヘッドは、普段の私たちの意識に現象(appearance)する世界が、实在(reality)の多様で複雑な深みと広がりからいくつかの要素を選択し強調した表層的なものであると述べている(cf. PR 15. AI 100, 180. MT 123-125)。現実世界そのものが表層的なのではない。ホワイトヘッドの宇宙論は、实在の宇宙が、幾重にも重層的に広がる不可測の深みをたたえた多様性と、それにもかかわらずそれが「ひとつの今、ひとつのここ」(SMW 69. 邦訳 93)に現前するという統一性をもったものだとしている。しかし、そのような实在の深みの直中であって、私たちの自己意識に現象するその光景は、その深みの全体を透察し汲み尽くすことができない。ホワイトヘッドは次のように述べている。

「メンタリティは、単純化の作用者である。この理由で、現象は、实在の信じがたいほど単純化された複製である。」(AI 213. 邦訳 293)

私たちの普段のメンタリティは、重層的に広がっていく宇宙の奥深く重厚な深みの全体を汲み尽くすことができず、それを単純化している。意識されている世界は、混沌としてそれと判別することもできない広大な半影を背景にして、一定の意味をもった情景や性格や行為等々として認識され特定の情緒的トーンを帯びて感じられる一群の出来事が前景に浮かぶ、奥行きのある世界である。抽象化において、意識は、この奥行きのある認識世界から、関連のある前景部分を選択して強調し、他を捨象する。渾然としてそれと名指しすることもできない多なるごった返しが、明晰判明な意識的知覚へと生成していくプロセスの解明こそ、ホワイトヘッドが、抽象概念を用いて具体性に迫っていく中心的な方途である。

ホワイトヘッドは、このプロセスを次のように定式化する。

「多が一になり、一つ増し加えられる(The many become one, and are increased by one).」(PR 21. 邦訳 35)

「多」と「一」は、「創造性」と並んで、ホワイトヘッドの形而上学的宇宙論体系において「究極的なもの

の範疇」を構成している(PR 21. 邦訳 34)。その中でも「創造性」は、「普遍的なもののうちの普遍的なもの」(ibid. 同所)であり、しかもそれをホワイトヘッドは「新しさの原理(the principle of novelty)」(ibid. 同所)と呼ぶ。彼が目指すのは、新しさへと創造的に前進する世界を思索する形而上学体系である。「リアリティはプロセスである」という最初の直観に基づいて、「創造性」という究極的なものの範疇に基づいて、「多」が「一」になっていき、あらたに生成したこの「一」がもとの「多」に増し加えられるという世界の論理を定式化することが、彼の思弁哲学の野心的で冒険的な試みである。

「説明の第一の範疇」において「現実世界はプロセスであり、プロセスとはアクチュアル・エンティティの生成である」(PR 22. 邦訳 37)と言われていたが、生成とは、現実世界の「多」なるものがその自己創造活動のための所与として、相まって新しい「一」なるものへと共に成長していく(growing together)ということ、つまり「合生(concrescence)」でもある(AI 236. 邦訳 325)。「創造性」というもつとも普遍的で抽象的な働きは、〈神〉の特殊な関わりによる誘因と、〈世界〉の多なる他のアクチュアル・エンティティズの所与性によって具体化されて、一つのアクチュアル・エンティティの生成に働きかける。しかし、それは創造者による制作活動ではなく、生成するものの自己実現である。〈神〉によってそのつど立てられる最初の目的は、諸可能性の制限ではあるが、自由の剥奪ではない。最初の目的から生成の主體的な目的が定められていくが、それは機械論的決定論の全体設計図を個々の出来事に振り分けた個別設計図といったたぐいのものではない。むしろ、最初の目的は、こちらへと誘い、彼方へと促す誘因であり衝動であって、主體的目的は、それを受けて生成していく主体の意欲がそこへと向かって多なる活動性を統合していくめあてである。そこには未決定があり、限定性とともな制約された自由がある。「こうして、直接的な契機は、それ自身の本質である自発性に基づいて、主體的形式を総合するための欠落している決定(the missing determination)を補わなければならない。」(AI 255. 邦訳 351) 〈神〉によるとされる最初の目的の定立が誘いであり促しであって、これを受けて立てられていく主體的目的が「欠落した決定」であるがゆえに、多が一となる世界は、必然性が支配する目的論的決定論の世界ではなく、創造性による偶発的出来事が満ちた世界となる<sup>25</sup>。

有機体の哲学は、「創造性」の具体的な働きを超越的な創造者と内在的で受動的な被造物との二元論的な構図において捉えるのではなく、生成／消滅の自発的ダイナミズムとして捉える。このように創造性の具体化を生成と捉えるところに、この哲学が「多」にして「一」の動的な多元論を提唱する立脚点がある。この観点から、私たちの直接経験する世界は、「創造性」によって賦活された、多なるものが一なるものを目指して共に成長していく自己実現のプロセスとして解明されるのである。

一方、生成した「一」は、それがそこから由来した多なる世界を構成する一要素として、この世界の多様性に増し加えられていく。それは、量的に一つ増えるというだけのことではなく、多なる世界の刷新である。これが世界の新しさへの創造的前進という学説であり、ホワイトヘッド哲学がその全体系を通じて提示しようとするものである。各々のアクチュアル・エンティティは生成し、その生成した個別的自己を「多」なる世界へ増し加えることで、世界の創造的前進に参与する。

私たち自身もまた、それぞれが、一瞬一瞬、「多」と「一」との創造的なコントラストの直中で、そのひるがえりさざめく創造的な前進の焦点として生起していくひとつひとつの生成の出来事である。つまり、多から生成する一は、創造的に前進する世界の、その創造の焦点として生成する<sup>26</sup>。

<sup>25</sup> ホワイトヘッドの〈神〉と偶然性の問題に関する解釈をここでは尽くすことができない。この問題について、次の論考は、必要な議論をコンパクトにまとめており、大いに示唆的である。荒川善廣「プロセスと偶然性—ホワイトヘッドと九鬼周造—」日本ホワイトヘッド・プロセス学会編『プロセス思想』第10号、2002年、49-63。

<sup>26</sup> これと同様の問題意識は、たとえばシカゴ学派の社会学者にしてプラグマティズムの哲学者として知られるジョージ・ハーバート・ミードにも見られる。ミードは、初期の書評で、「個人は宇宙の本質的表現である」と言っているのだが、これと同じことが、ホワイトヘッドにおいてより深く広く考察されていることに、後になって気づく。初期のミードは、ヘーゲルの弁証法に飽き足らず、「ヘーゲルにとって、存在はプロセスのなかの諸契機のひとつであるとともに、啓示されるべき全内容である」が、このような「存在」、すなわち「固定された内容または実体は、特殊と普遍の問題をけって解決できない」と述べている。

## 10. 関係性という具体的事実

具体性へと迫るためのホワイトヘッドのもう1つの方途は、「実体」概念（あるいは「実体—属性（性質）」概念）を捨てて、具体的なものを恒常的に存続する個物としてではなく生成変化する「関係性」として論究することである。この論究は、「抱握理論」と呼ばれている。「アクチュアル・エンティティ」はさまざまな仕方でさまざまな構成要素に分析されるが、特に、「アクチュアル・エンティティを『抱握』へと分析することは、アクチュアル・エンティティの本性における最も具体的な要素を示す仕方の分析である。」(PR 19. 邦訳 31)とホワイトヘッドは言う。「抱握」とは、アクチュアル・エンティティの活動性のことであり、1つのアクチュアル・エンティティがその現実世界を構成する他の諸々のアクチュアル・エンティティズと関係する仕方である。「抱握は、それ自身において、あるアクチュアル・エンティティの一般性格を再現する。それは外界に関わり合いをもち、この意味で『ベクトル性格』をもつといえる。それは、情動、目的、価値づけ、そして因果作用を含んでいる。」(PR 19. 邦訳 31)「今、ここ」に生起するアクチュアル・エンティティは、かつて生起した他の諸々のアクチュアル・エンティティズを客体化されたものとして「抱握」し、それ自身の経験の契機の内的な構成要素とする。「今、ここ」での経験の構成要素として他のアクチュアル・エンティティを受容することは、特に「積極的抱握」と呼ばれる活動である。ホワイトヘッドはこの「積極的抱握」を「感じ」(feeling)とも言い換えている。これに対して、「消極的抱握」とは、それ自身の構成要素として受容しない、という排除・捨象の関係性である。「抱握」を、ホワイトヘッドは、「関係性という具体的事実(Prehensions, or Concrete Fact of Relatedness)」(PR 22. 邦訳 36)とも言い換えている。それは、過ぎ去った彼方の多から此方の新たな一への関係性である。

ホワイトヘッドの形而上学において、世界の多様性は、経験の原初相において渾然としたごった返しの中で塊状の広がりとして感じられ、その輪郭は半影のなかにもどこまでも遠ざかっていくような、漠たる何かである。しかし、それは彼方から此方へと迫りくる何かであり、彼方のごった返しから此方の認識が生まれるプロセスである。ホワイトヘッドの言葉で言えば、「感じはベクトルである。というのも、それはそこにあるものを感じ、それをここにあるものへと転換するからである」(PR. 87)。抱握とは、彼方にある過ぎ去ったアクチュアル・エンティティズを、此方の新たな「今、ここ」に迎え入れて、その経験の構成要素として受容することである。そのような意味で、抱握には、彼方から此方へ、過去から現在へ、というベクトル性格があるといえる。このベクトルをもった「感じ」、つまり「抱握」において、彼方の多が此方の一へと統合されていく。彼方の多なるものから此方の一なるものが生成するというベクトル性格をもった活動が「抱握」である。それはまた、客体化された多なる他者から一なる主体が生成するという関係性ともいえる。

現実世界の多なる要素を「今、ここ」に現前するものとして感じつつ、新たな価値を実現する営みが、「多」の「一」への統合としてのアクチュアル・エンティティの生成のプロセスである。このプロセスを分析するホワイトヘッドの議論は、多を一へと統合しつつ新しさを実現する合生のプロセスを論じる「抱握」の理論、特に、現実世界の多なる要素を統一的な認識へと統合して一つの事態として認識する「命題的感じ」の生起に関する議論として展開される。その議論のベースになるのは、現実世界を、多が一へと統合され、またその新しい一が多に増し加えられるというプロセスによって、新しさへと創造的に前進する大きなプロセスと理解する視座である。

---

初期から中期にかけてのミードの思索は、固定的で実体的な「存在」の思索から「プロセス」の思索へと向かう活路を見出そうとした悪戦苦闘のドキュメントである。ミードの思索の道は、残念なことにその途上で断たれたが、そこには、「多と一」という形而上学的存在論の中心論題をはじめ、「全体と個」、「普遍と特殊」、「創造性と調和的秩序」といったコントラストに対する深い問題意識が明確である。そして、ミードは、後期の思索のなかで、ホワイトヘッド哲学に出会い、これらのコントラストをなす形而上学的な諸問題の解決の道を、有機体の哲学のうちに見出していく。この間のミード哲学の展開は、加藤一己氏の篤実な研究と翻訳によって日本にも知られるようになった。加藤一己「G.H.ミードの思想形成過程」、『初期シカゴ学派の世界』恒星社厚生閣、2004年所収。G.H.ミード『G.H.ミード プラグマティズムの展開』加藤一己・宝月誠編訳、ミネルヴァ書房、2004年。

## 1.1. ホワイトヘッドの考え方

最後に、ホワイトヘッドの哲学に関する考え方を見ておこう。ホワイトヘッドの思弁哲学を「具体的なものへ」と迫るような経験論だと評したのはジャン・ヴァールである。「そうした経験論は、われわれを實在に直面させる。」<sup>27</sup>

しかし、ホワイトヘッドの哲学は、極めて抽象的な一般的諸観念を表す特殊な術語に満ちている。特に、彼の形而上学の体系的な言語は、高度な抽象の産物である。ホワイトヘッドはこのことを明記している。「哲学の説明の目的は、しばしば誤解されている」とホワイトヘッドは言い、次のように続ける。

「哲学の仕事は、より具体的な事物からのより抽象的な事物の発現(emergence of the more abstract things from the more concrete things)を説明することである。具体的かつ特殊な事実が、普遍的なものからいかんにして形成されうるか、と問うことは、完全な誤りである。『どのようにしてもできない』というのがその答えである。真の哲学の問いは、具体的事実が、それ自身から抽象され、しかもなおそれ自身の本性によって関与しているエンティティをいかんにして示しうるのか、ということである。」

この「真の哲学的問い」については、『相対性原理』第二章を参照するようホワイトヘッド自身が注釈をつけている。そこでは、「関係性(Relatedness)」、特に「自然の関係性(the Relatedness of Nature) (R 13. 邦訳 14)が論究されており、「事実とは諸要因の結合関係のことである(Fact is a relationship of factors)」と言われている(R 14. 邦訳 15)。ここには、のちに「有機体の哲学」において「関係性(related)」を具体的事実とし、これを「抱握」概念によって論究していくための視点がすでに示されている<sup>28</sup>。

関係性の具体的事実としての「抱握」によって、現実世界の具体性のただ中で、この具体的事実を構成する多様な要素を抱握しつつ、その抱握の主体が生成していく。言い換えると、具体性の中で、その具体性を経験しながら、1つの経験の契機が生成していく。この経験を通して、具体的なものの多様性は取捨選択され、ある要素は背景に追いやられ、ある要素は強調されて、意識が成立していく。意識は、主体が具体的なものを抱握する形式の1つである。意識という主体的形式において明晰さが増せば増すほど、抽象の度合いは相対的に高まる。経験の契機の生成のプロセスは、具体的なものから抽象的なものが派生するプロセスであり、この新しい生成物は、生成を終えると新しい1つの要素として具体的なものの多様性に増し加えられていく。これが、「多が一になり、一つ増し加えられる」という多即一の創造的プロセスである。

「具体性を置き違える誤謬」という考えは、科学や哲学がその方法によって何を捨象したのかを常に意識しなければならない、という当たり前のことを言っている。しかし、それは厳密には不可能である。何を捨

<sup>27</sup> ジャン・ヴァール『具体的なものへ』「第二部 ホワイトヘッドの思弁哲学」水野浩二訳、月曜社、2010年、168ページ。引用箇所は見事なホワイトヘッド哲学の描写の出だしなので、これに続く全文を引用しておく。「そうした経験論は、われわれを實在に直面させる。そうした實在とは、現在に圧力を加えるかぎりでの過去のことであり、持続の集合の連続としての時間のことであり、われわれの帰納的推理およびわれわれの知覚よりも劣ったものに直面している、かさばるものとしての空間のことであり、われわれの身体についての感覚であり、未来と過去との一致の感覚であり、われわれの外部にあるものについてのわれわれの把握であり、さらにもっと深入りするなら、ホワイトヘッドが受容と呼んでいるものである。なぜなら、宇宙におけるあらゆる出来事と同様に、われわれは捉えられているものであり、また、われわれは捉えるものであるからである。そして、われわれのなかに現れるものは、ある實在から他の實在への推移であるかぎりでの、また實在相互による吸収であるかぎりでの世界の本質であるからである。」(ヴァール、同所)

<sup>28</sup> ホワイトヘッドは、彼自身が具体的事実ないし事実について語っていると『相対性原理』のこの箇所で、実際には、事実を構成する要因(factors)の相互の関係性(relatedness)および事実に対する要因の関連(reference)に言及している。個物相互の関係性と、個物の全体への関連こそが具体的なものであり、この関係性および関連の中で個物が生成し全体が創造的に前進する、ということであろうか。「事実のどの要因も本質的に事実内部のその結合関係に関連をもつ。この関連を離れるならば、それはそれ自身でなくなる。したがって、事実のどの要因もその背景に事実を有しているのであって、それ自身に固有な仕方でも事実と関連するのである。」(R 14. 邦訳 15 ページ)

象していたのかをリストアップし尽くすことはできない。明晰判明な理論が捨象しているのは、ほとんど現実世界のまるごと全体で、逆に選択され強調されたのは、その中の、主題に関連するごくごく一部のことにすぎない。他のほとんどが雑音や誤差として消される。「ラボ」とか「実験室」とか「サンプル抽出」とかは、この多様な世界のほとんど全体からなるさまざまな雑音を消して研究の主題となる領域だけを選択的に残す努力の一つである。

科学も、哲学も、それぞれの専門に応じた方法によって、数えきれない「多」から、慎重に「一」を生成している。その方法は学問の世界で絶えず吟味され改良されている。

そのようにして、学知において、「多」から「一」が生成するというプロセスが繰り返される。その「一」には、しかし、マスクされ誤差や雑音として消去された数えきれない多が、微かに反映しているかもしれない。手持ちの方法ではその痕跡が認められなくても、それらの「多」が消されてしまったわけではないことを、方法を用いる者は知っておかなければならないというのが、「具体性を置き違える誤謬」という考えの訴えるところである。それらの「多」は、研究をはじめたときの最初の環境設定のところエポケーされていたにすぎない。それでも、エポケーされたそれらの「多」なるものの余韻というか痕跡というか微弱な影響連関は、理論として提示された「一」の中にいろいろな仕方でも反映されているはずだ。一つ一つを読み取るにはまた別の方法によって膨大な費用と手間と時間と努力を傾注しなければならないような無数のものが、生成してきた一つの理論、一つの命題、一つの学説の中に、あるいはその余白にある。

そして、こうした学知の生成のプロセス、「多」から「一」が生成するプロセスは、認識のプロセスそのものについても言える。むしろ、私たちの認識のプロセスが、そもそも、現実世界の判別もできないような無数の与件からいくつかの要素を選択し、意識においてそれを強調し補正し解釈もしていると言った方がいい。そこにも「多」が「一」になる、というプロセスが絶えず起きている。私たちの経験は、現実世界の「多」なる与件が、「今、ここ」において「一」なる経験の統一体へと生成していく瞬間瞬間のプロセスの連続である。

注意してよくよく見ると、その「一」には、マスクし排除した無数のものが反映しているのが分かるかもしれない。その「一」は、「多」を含み、「多」を代表する「一」（「多」を表象する「一」）、「多即一」の「一」である。私たちの経験のワンシーンも、自分でそのとき意識している範囲というのはものすごく狭いけれども、そのワンシーンを克明に凝視し、ものすごい試行錯誤の手間や努力を傾注すれば、そのワンシーンにも無数の連関があり、その連関はそのシーンを超えて空間的にも時間的にも因果的にも連想的にも広がって行って現実世界のほぼ全領域に及んでいくということが、見えてくる（かもしれない）。

たとえば、昨日、浦井先生のセミナーですばらしい経験をした、あの一瞬一瞬の中にも、メンバーのそれぞれの、そこに至るまでの膨大な経験やその経験をもたらしした状況の重なりや広がりがあり、メンバーとは認識されないような要素、たとえばキャンパスのたたずまいとか会議室の内装や備品とかあの日々の天気とか朝刊の報道とか誰かの不在欠席までもが、その一瞬一瞬の経験を構成する要素になっている。議論された言葉だけでなく、たとえばマイクの電源のオン・オフも、発表者や聴衆の表情やしぐさも、資料のフォントサイズやレイアウトなども、議論の方向を左右した要因だった可能性がある。たとえば私はレミオロメンの「3月9日」を聴きながら研究棟までの坂を登ってきたが、それがセミナー中もずっと心の中に鳴り響いていた。そういった混然となった無数の要因もひとまず情的・雰囲氣的に背景的なトーンとして漠然と感じながらも、意識は研究発表の議論のそのつどの焦点に向けられたり、理解のための努力に向けられたりしていた。

これは卑近な例だが、このように漠然としたものも判明なものも含めて無数の「多」が、その大半が背景へと退きながら、前景に「一」の焦点的領域を形成していくということが、認識の成立プロセスである。つまり、「多」が「一」となるということである。

この生成の出来事の瞬間瞬間が連なりながら、その前景的な「一」の連続性が生成する。たとえば、研究会で研究発表に意識を集中し続けるとき、その連続性は、「多」が「一」へと生成する瞬間瞬間の出来事の連

なりで、いわば、非連続のものの連続である。そして、その一つ一つの契機の中に、背景へと追いやられた無数の「多」がある。その「多」にも関係性の濃淡があつて、前景的なものに濃い関連をもっていてすぐ近く感じられる要因から、ごくごく薄く間接的な関連がかるうじて認められるかもしれないようなはるか彼方の要因まで様々である。さらにその先は、私の意識には判明には登ってこないような、要するに私が意識的には決して知ることのないより広大な領域が広がっている。私は、意識の閾域下で、この薄暗く不分明な果てしない領域の広がりを知っている。ウィリアム・ジェイムズは『心理学原理』で、この意識の外の領域において私たちの個別的自己は明確な境界を失って宇宙とつながっていると論じた。ホワイトヘッドもジェイムズのこの議論を踏襲している。

一へと生成していく多なるものの関係性は、こうして現実世界の全体に及んでいる。比喩的にいえば光円錐の内側のように、あのとときのあの私を頂点にして、私に関係した多なるものの現実世界が際限なく広がっている。こうしてはるか彼方の半影のように霞んでいくかぎりない領域の全体が、あのとときの私という「アクトチュアル・エンティティ」の「現実世界(actual world)」である。そして、光円錐がどんどん未来に向かって進んで行くように、多が一になるという私のプロセスも非連続の連続的に未来に連なっていく。

## 12. 結び

ホワイトヘッドは、上記の引用に続けて最後にこう言っている。「換言すれば、哲学は抽象を説明するのであって、具体をではない。」(PR 20. 邦訳 32)一般的な諸観念からなる最も抽象的な体系的構図によって実在の自己表現の形式としての論理を定式化し、そのことによって「私たちを実在に直面させる」のが、ホワイトヘッドの哲学であるといえる。具体をではなく抽象を説明する形而上学体系によって、読者を経験の具体相に迫らせるということが、「想像的一般化」の働きなのだろう。

## 文献

ホワイトヘッド(Alfred North Whitehead)の著作は、引用に際して以下のように略記し、該当するページ数および松籟社から刊行されている邦訳著作集の該当ページ数を付記する。

- AI: *Adventures of Ideas*. 1933. New York: Free Press, 1967. (『観念の冒険』ホワイトヘッド著作集第12巻、山本誠作、菱木政晴訳、松籟社、1982年)
- CN: *The Concept of Nature: The Turner Lectures Delivered in Trinity College, November 1919*. 1920. Cambridge: Cambridge University Press, 1964. (『自然という概念』ホワイトヘッド著作集第4巻、藤川吉美訳、松籟社、1982年)
- PR: *Process and Reality: An Essay in Cosmology*. 1929. Corrected Edition. New York: Free Press, 1978. (『過程と実在(上)(下)』ホワイトヘッド著作集第10・11巻、山本誠作訳、松籟社、1984年、1985年)
- R: *The Principle of Relativity with Applications to Physical Science*. 1922. Mineola: Dover Publications, 2004. (『相対性原理』ホワイトヘッド著作集第5巻、藤川吉美訳、松籟社、1983年)
- S: *Symbolism: Its Meaning and Effect*. 1927. Fordham University Press, 1985. (『象徴作用』市井三郎訳、ホワイトヘッド著作集第8巻『理性の機能・象徴作用』藤川吉美、市井三郎訳、松籟社、1981年、所収)
- SMW: *Science and the Modern World*. 1925. New York: Free Press, 1967. (『科学と近代世界』ホワイトヘッド著作集第6巻、上田泰治、村上至孝訳、松籟社、1981年)
- MT: *Modes of Thought*. 1938. New York: Free Press, 1968. (『思考の諸様態』ホワイトヘッド著作集第13巻、藤川吉美、伊藤重行訳、松籟社、1980年)
- ESP: *Essays in Science and Philosophy*. 1947. New York: Greenwood Press, 1968. (『科学・哲学論集(上)(下)』ホワイトヘッド著作集第14・15巻、蜂谷昭雄、井上健、村形明子、橋口正夫訳、松籟社、1987年、

1989年)